

# 新堂廃寺発掘調査概要III



1999.3

大阪府教育委員会



## はしがき

富田林市緑ヶ丘町に所在する新堂庵寺は、飛鳥時代に創建された南河内最古の古代寺院で、飛鳥寺・四天王寺と並ぶ日本で最も古い寺院のひとつであります。また、周辺にはこの寺を建てた豪族の墓と考えられるお龜石古墳や、瓦を焼いたヲガンジ池瓦窯が存在しており、古代寺院の成立等を考えるうえで全国的にもきわめて重要な遺跡であります。

新堂庵寺が立地する南河内は、大和の「遠つ飛鳥」に対して「近つ飛鳥」と呼ばれ、国際交流の玄関口にあたる難波と飛鳥を結ぶ幹線道竹内街道が近くを通るなど政治的・経済的要衝の地でした。

大阪府教育委員会では、1959・60年に府営富田林北住宅建設工事に伴い、主要伽藍地の一部を調査し、塔・金堂・講堂など4つの建物跡を発見しました。そして、1995年から始まった府営富田林緑ヶ丘住宅の第1期建て替え工事に伴う調査では、寺域北側に広がる、当庵寺維持・經營に関わった人々の集落が見つかっております。

今回の第2期建て替え工事に伴う大阪府教育委員会の調査と、富田林市教育委員会の範囲確認調査によって、中門や回廊・南門・築地塀など創建時のものを含む伽藍のあとが次々と発見され、今まで「幻の寺」と呼ばれていた新堂庵寺の実態を解明する貴重な調査成果を得ることができました。

最後に、調査の実施にあたって、地元関係各位をはじめとする諸機関・諸氏には格別のご協力をいただきました。本概要報告書を上梓するにあたり深く感謝いたします。今度とも文化財保護行政に一層のご協力とご理解をお願いする次第であります。

平成11年3月

大阪府教育委員会文化財保護課長 鹿野 一美

## 例　　言

1. 本書は、府営富田林緑ヶ丘住宅第2期（建て替え）建設工事にともなう新堂廃寺発掘調査および範囲確認調査の概要報告書である。
2. 調査は、大阪府建築都市部住宅整備課の依頼を受けて大阪府教育委員会が実施した。
3. 調査は、大阪府教育委員会文化財保護課技師 小浜成が、平成10年7月24日から実施し、併せて概要報告書作成に当たり、平成11年3月31日に終了した。
4. 本書に使用した方位は、座標北を示し、標高はT.P.で示している。
5. 本書に使用した座標は、国土座標第VI座標系に基づいている。
6. 遺物写真は、阿南写真工房に委託した。
7. 現地の調査および遺物整理の過程で、以下の方々のご教示・ご援助をいただいた。記して、感謝の意を表します（敬称略）。  
猪熊兼勝・岩永省三・上田睦・上原真人・大脇潔・小倉徹也・小沢毅・北野耕平・金田章裕・近藤康司・斎部麻耶・柴原永遠男・佐藤隆・清水みき・清家章・十河良和・趙哲済・坪井清足・東野治之・花谷浩・菱田哲郎・広瀬和雄・藤井利章・藤沢一夫・藤田憲司・松村憲司・宮本佐知子・森郁夫・山下隆次・山中章・山中一郎・吉川真司・揖河泉古瓦研究会
8. 調査の実施に当たっては、富田林緑ヶ丘住宅の方々をはじめ、大阪府建築都市部住宅整備課、富田林市教育委員会など多くの方々のご協力をいただいた。深く感謝の意を表します。
9. 本書は、第1・2・3・4・6章を小浜が、第5章第1節を堀大輔（京都大学大学院聴講生）が、第5章第2節を岩戸晶子（京都大学大学院）が分担執筆し、編集は小浜が行った。

## 本文目次

第1章 調査経過と方法	3
第1節 調査経過	3
第2節 調査方法	4
第2章 歴史的環境	6
第1節 新堂廃寺とお龜石古墳・ヲガンジ池瓦窯	6
第2節 新堂廃寺の立地と造営主体	7
第3章 寺域内の調査	8
第1節 中門	8
第2節 回廊	9
第3節 参道	10
第4節 南門	11
第5節 築地塀	14
第6節 宝幢遺構	15
第7節 南限区画溝	15
第4章 寺域南側の調査	19
第1節 造営以前の景観	19
第2節 造営時および直後の景観	19
第3節 廃絶後の景観	19
第5章 出土遺物	21
第1節 軒瓦	21
第2節 道具瓦他	24
第6章まとめ	27
第1節 寺域の造営過程	27
第2節 伽藍の復元～歴史地理的検討も含めて～	30

## 挿図目次

写真1 新堂廃寺とその周辺（南東から）	7
第1図 主要伽藍と調査区	3
第2図 地区割表示図	4
第3図 調査区設定図	5
第4図 新堂廃寺と関連遺跡	6
第5図 中門遺構変遷図	8
第6図 中門周辺出土主要軒瓦	9

第7図	回廊創建面平・断面図	10
第8図	回廊廻絶状況図	11
第9図	南門造営以前の遺構平面図	12
第10図	南門・築地塀・宝幢遺構平面図	12
第11図	南門南西隅瓦崩落状況図	13
第12図	南門基壇・築地塀と南限区画溝相関断面図	13
第13図	鶴尾片をもつ掘方断面	14
第14図	南門柱掘方内礎板転用鶴尾出土状況図	14
第15図	南門・回廊・整地上出土主要軒瓦	15
第16図	南限区画溝出土遺物	16
第17図	東方トレンチ平・断面図	16
第18図	西方トレンチ平・断面図	16
第19図	南門造営後の遺構面および中門・南門間整地状況断面図	17~18
第20図	寺域南側調査区平面図	20
第21図	出土主要軒丸瓦型式一覧	23
第22図	出土主要軒平瓦型式一覧	24
第23図	鶴尾復元図（1／20）	25
第24図	鶴尾・鬼瓦・蝶瓦・不明瓦製品	26
第25図	遺構変遷図	28
第26図	伽藍復元図	29
第27図	旧地形図と調査成果	30

### 図版目次

図版一	上 上空（西）から新堂庵寺を望む	下 参道検出状況と主要伽藍跡地（南から）
図版二	上 中門基壇検出状況（南から）	下 中門基壇及び東回廊検出状況（南東から）
図版三	上 回廊創建面検出状況（西から）	下 回廊廻絶状況（西から）
図版四	上 南門・宝幢遺構検出状況（南から）	下 南門・宝幢遺構全景（南から）
図版五	上 南門瓦落検出状況（南から）	下 南門基壇南西隅検出状況（南から）
図版六	上 築地塀検出状況（南東から）	下 南限区画溝・南門基壇相関関係（東から）
図版七	上 寺域南側調査区東半（西から）	下 寺域南側調査区西半（北から）
図版八	1. 西方トレンチ全景（北から） 2. 東方トレンチ全景（南から） 3. 南門瓦崩落状況（東から） 4. 築地塀地鎮遺構（南から） 5. 回廊基壇断面（南東から） 6. 掘方7鶴尾出土状況（北から） 7. 掘方11柱芯痕跡と礎板転用鶴尾（南から） 8. 掘方11鶴尾出土状況（上が南）	
図版九	出土主要軒瓦（1）	
図版十	出土主要軒瓦（2）	
図版十一	鶴尾・鬼瓦・蝶瓦・不明瓦製品	

# 第1章 調査経過と方法

## 第1節 調査経過

新堂廃寺は大正年間より古瓦が出土することが知られ、石田茂作の『飛鳥時代寺院址の研究』に紹介されたことにより、広く存在が認められるようになった。その当時、新堂廃寺周辺は一面水田風景を残しており、かつて主要伽藍が存在していた地区はわずかながら方形壇状の地形が残っている状況であった。1959年、当地域（現富田林市緑ヶ丘）に「府営富田林北住宅」の建設が計画されたことにより試掘調査を行った結果、瓦積基壇の一部などが確認された。これを受け、翌1960年、周辺約3,500m<sup>2</sup>の全面発掘調査を行った。この調査によって、南北に連なる白鳳時代の3つの建物とその西側の奈良時代の瓦積基壇建物を確認した。そして、本府建築部との協議の結果、伽藍の主要部分を広場として保存することとなった（第1図）。しかし、結果的にこの保存区域には主要伽藍の東半が含まれておらず、その東半部分はすでに住宅が建設済みであったために未調査のまま今日に至ることとなった。

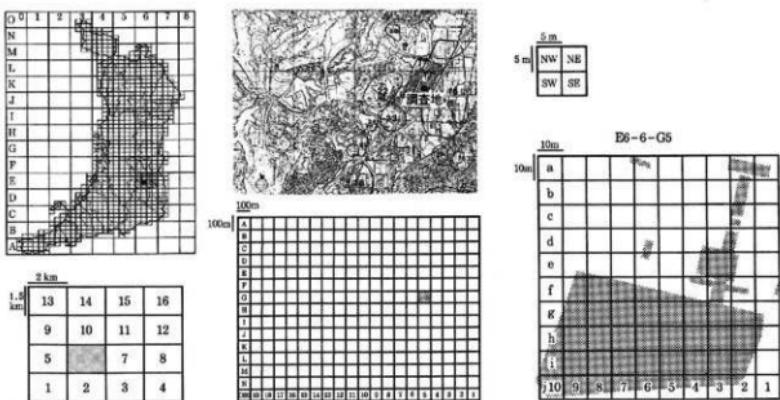
1992年に、この府営富田林北住宅の建て替えが具体化したのを契機に、本府教育委員会文化財保護課は、建築部住宅建設課と協議を重ね、住宅建設時の未調査部分について試掘調査を実施し、寺域の確定と保存区域の見直しを計ることになった。この試掘調査によって、主要伽藍部分を中心南北約200m、東西約100mを寺域と想定し、保存区域とすることを建築部に依頼した。ただし、推定寺域の南部分については、建て替えによる居住者の移転が完了していなかったために十分な試掘調査が実施できなかつたので、移転完了時に実施することとし、その時点で建築実施設計の見直しについて協議を行うこととした。

発掘調査については、92年の試掘調査により推定寺域がほぼ確定している部分から、1995年以降複数年にわたって実施することとした。

そして、1995年度に、まず第1期建て替え工事にともなって、推定寺域外の北東部を約5,400m<sup>2</sup>



第1図 主要伽藍と調査区



第2図 地区割表示図

調査を行い、奈良～平安時代の建物群を発見した。これらの建物群は、再建された寺院を経営・維持していた集落と捉えられている。

そして、1998年度、第2期建て替え工事にともなって、推定寺域外の南側約3,400m<sup>2</sup>を全面調査するとともに、試掘調査の完了していなかった推定寺域南部分にトレーンチを設定し、南限を確定するための範囲確認調査を行うこととなった。

## 第2節 調査方法

寺域の範囲確認調査に関しては、南限を確認することが目的であるため、伽藍配置を考える上で、1959・60年の調査で明らかになった建物のうち南北に連立する3棟の建物を重視し、その3棟の建物の中軸線を南側に延長して、この中軸線を中心幅5mの中央トレーンチを南北長約55mにわたって設定した。そして、調査の進展に応じて調査区の拡張や追加トレーンチ（北方・東方・西方・北西トレーンチ）の設定を行った（第3図）。なお、中央トレーンチについては、南北に長いため、調査上、推定中軸線を5m間隔に区切り、北から順にA～L区とし、さらにトレーンチの頭文字のアルファベットTを付し、TA区などと呼称することとした。

寺域南側の、住宅建て替え工事にともなう調査区においては、国土座標軸第VI座標系を基準線とし、大阪府全域を共通の方式で区割できるように、大小I～Vの5段階の区画設定を用いている。第I区画は1/10,000地形図を、第II区画は1/2,500地形図を利用し、第III区画は第II区画内を100m単位で区画、第IV区画は第III区画内を10m単位で区画するものである。そして、第V区画は第IV区画内を5m単位で4分割するものである。その結果、この新堂廃寺の調査区は、E6-6-G5-1～10-NE・NM・SE・SWのメッシュを設定し、調査を行った（第2図）。

遺構番号については、調査・整理段階の混乱を避けるため、遺構の種別に関わらず通し番号を付することを基本とした。しかし、トレーンチと寺域南側の調査区との調査同時併行による遺構番号

の重複を避けるため、トレンチ内での遺構には番号の頭にアルファベットTを付した。なお、寺域内の遺構については、明確に寺に関係する遺構であり、南門や回廊・参道・築地塀・雨落溝などと想定できるものについては、その固有名詞を冠して遺物取り上げを行っている。今後の整理報告書作成の際に統一を計りたい。

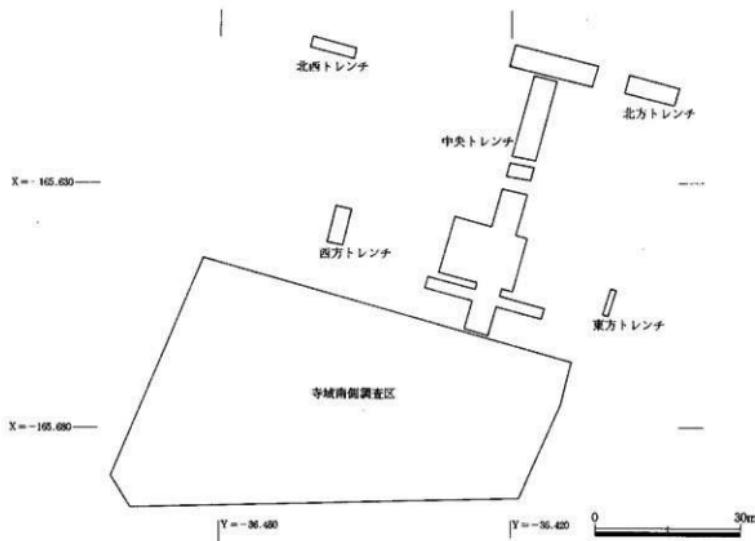
調査面積は、寺域範囲確認のトレンチ部分が約400m<sup>2</sup>、寺域南側の調査区が約3,400m<sup>2</sup>の合わせて約3,800m<sup>2</sup>である。

#### 《参考文献》

- 大阪府教育委員会『河内新堂烏合寺の調査』 1961年  
同 上 『新堂庵寺発掘調査概要』 1996年  
同 上 『新堂庵寺発掘調査概要 II』 1997年  
富田林市史編集委員会『富田林市史 第1巻』 1985年

現地の発掘調査および整理作業においては、以下の方々の参加を得た。記して、感謝いたします（五十音順）。

赤松 恵・有馬定治・井上宗嗣・岩戸晶子・岩井俊平・上野祥史・梶原義実・黒川智恵子・小門邦代・瀬戸直子・十河美奈・谷内志保・中井 環・中野渡昌子・仁木 聰・野口成美・藤井 眇・堀 大輔・箕造加奈子・矢倉嘉人



第3図 調査区設定図

## 第2章 歴史的環境

### 第1節 新堂廃寺とお龜石古墳・ヲガンジ池瓦窯（第4図・写真1）

石川左岸の中位段丘上に立地する新堂廃寺は、飛鳥時代創建の南河内最古の寺院として、古くより学界に知られた存在であった。しかし、その実態については、不明な点が未だ多い状況であった。それは、1959・60年の調査によって伽藍の主要建物の一部が見つかっていながらも、伽藍配置を確定するには至らず、出土する飛鳥時代の軒瓦に対応する遺構も見つかっていなかったためであり、「幻の寺」とさえ呼ばれることもあった。

この新堂廃寺を学問的に位置づける際に、欠かすことのできないものにお龜石古墳の存在がある。この古墳は、新堂廃寺の北西約300mの丘陵上に位置している。発見当初よりすでに天井石がかなり取り除かれており、羨道が大きく開口している状態であった。主体部は、家形石棺の棺身裏側を長方形に開けた横口式石槨であり、墳形は直径約15mの円墳と考えられている。築造年代は、家形石棺と石室構造から大きく7世紀前半の年代観が与えられている。さらに、石棺の奥壁側の周囲に平瓦をコの字状に積み上げるという特徴がある。古墳の石室に瓦を用いる構造は、全国的に見ても稀であり、しかもその瓦は立地と年代観からして新堂廃寺の所用瓦である可能性が非常に高い。つまり、お龜石古墳は瓦を有することで、新堂廃寺建立に関わった氏族の首長墓と推定できる希有な古墳である。

お龜石古墳のある丘陵南東裾には、ヲガンジ池と呼ばれる池があり、その堤上に現在2基の瓦窯が発見されている（ヲガンジ池瓦窯）。1基は、構造が半地下式無段登窯であり、平城宮式軒瓦を含む瓦を焼いている。もう1基は、構造が半地下式有段登窯で、山田寺式軒丸瓦や重弧文軒平瓦を焼いていたことがわかっている。また、灰原からは飛鳥時代の軒丸瓦や垂木先瓦、川原寺式軒丸瓦や瓦棺などが出土しており、新堂廃寺創建段階から地元で瓦を供給できる体制があったことを伺わせる。

また、この瓦窯の「ヲガンジ」という名称から、韓国・百濟の扶余に実在した烏合寺（ヲガンジ）との関連を想起させ、百濟系要素を強く受けた軒瓦を有する新堂廃寺が、本来「烏合寺」と呼ばれていた可能性さえ喚起させている。

このように、新堂廃寺は、造営母体としての古墳・生産遺跡としての瓦窯・消費遺跡としての寺と、遺跡群としての把握が可能であり、寺院を総合的に検討し得る点で、今後の古代寺院研究においてきわめて重要な役割を担っている。



第4図 新堂廃寺と関連遺跡

## 第2節 新堂廃寺の立地と造営主体

新堂廃寺創建の瓦は、飛鳥寺と同範の瓦や四天王寺と同紋の瓦を含んでおり、当時の中央と強いつながりを見取することができる。それは、いち早く仏教を国内に取り入れた蘇我氏との結びつきの強さであり、仏教を施策の一つとして急速に仏教崇拜国家として成長を遂げようとする中で、飛鳥寺や四天王寺と同様に新堂廃寺が位置づけられていたからに他ならない。

新堂廃寺の立地を広い視野で見てみると、すぐ東側の石川をはさみ、二上山を間近に望むことができる（図版一上）。新堂廃寺のやや北方を通る竹内街道を通って二上山を越えると、飛鳥に至る。また、目を西に転じると、竹内街道は摂津四天王寺を通り、国際交流の窓口・難波津にいたる。つまり、新堂廃寺は、仏教の導入を含め、国際交流を行う当時の国家の中心地・飛鳥と難波を結ぶ交通のきわめて重要な地に位置しているのである。

この新堂廃寺を造営し得る主体として、蘇我氏との結びつきをもった在地有力氏族の存在が不可欠である。その氏族として、桜井氏や錦織氏などが想定される。そして、この新堂廃寺の造営に実際に関わった主体の集落としては、当廃寺の東側に大きく展開する中野遺跡が挙げられる。この中野遺跡は、古墳時代後期から奈良時代にかけての遺構・遺物が広範囲にみられ、とくに須恵器・瓦片を多く出土することから、新堂廃寺創建以前から造営中にかけて集落が存続していたと推測できる。新堂廃寺周辺での6～8世紀の大規模な集落遺跡としては、この中野遺跡が唯一であり、新堂廃寺の造営主体となる一大集落であった可能性は高い。



写真1 新堂廃寺とその周辺（南東から）

## 第3章 寺域内の調査

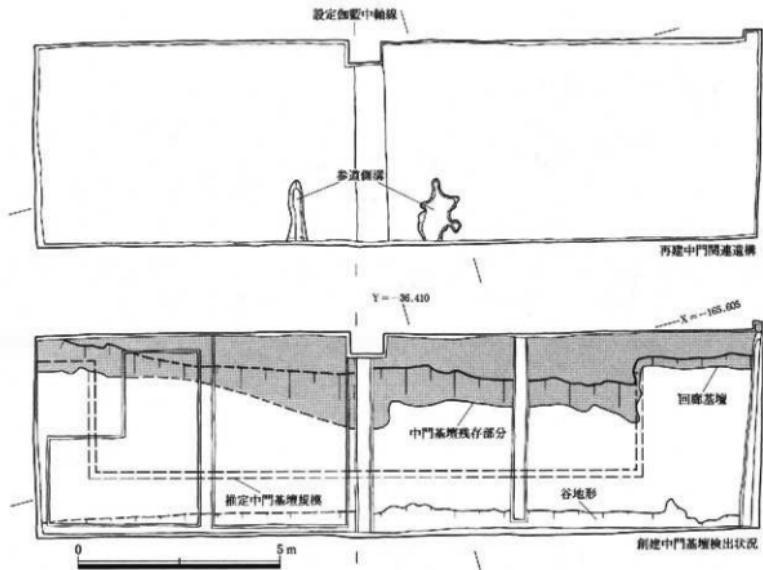
### 第1節 中門（第5図、図版二）

創建期 回廊から南側に張り出す基壇のうち東半分を面的に検出した。しかし、基壇裾はかなり損壊を受け、張り出しの原形をとどめていない状況であった。

基壇の張り出しの原形をとどめていないと判断した根拠として、①基壇が東側に取り付く回廊の南辺から南に、良好な部分で約1.5mしか張り出しておらず、基壇上に建物を想定する場合、張り出しの度合いが小さすぎること、②周辺にこぶし大強や人頭大弱の川原石や凝灰岩痕跡が認められ、基壇化粧材として用いられた可能性があるものの、基壇化粧が原位置をとどめていない状況であること、③雨落溝の痕跡も認められなかったこと、などが挙げられ、基壇裾は結果的にかなり損壊を受けて北側に後退してしまったと考えざるを得ない。

この基壇残存部分は、上面に一部盛土が認められるが、大半は地山を削り出している状況で検出している。しかし、残存基壇高が約0.4mと低く、削平度が大きいことから、後述の回廊と同様、地山上面に数層盛土をした後に削り出して成形している可能性は高い。

また、この中門基壇は、南側張り出し部分が谷地形の肩口からやや内側にまで入りこんだ状態で建っていたと考えられる（第19図参照）。つまり、基壇南端は、谷埋土の砂層上面に砂混じり



第5図 中門遺構変遷図

粘質土で整地を行い、基盤面を形成した上に構築したものである。しかし、南端の基壇土はほとんど残っておらず、後の建て替え時か、それ以前に既に損壊を受けていたと推定される。この基盤形成の行われた範囲を示す境界線を調査区内で検出している（第5図下）。この境界以南は、中門創建段階では、谷地形の湿地状態のまま放置されていることが判明した。

中門基壇の造営時期は、残存基壇部分周辺から飛鳥時代の軒瓦が比較的まとまって出土している（第6図）ことから、中門に葺かれていた可能性が高く、創建期に遡る可能性が高い。

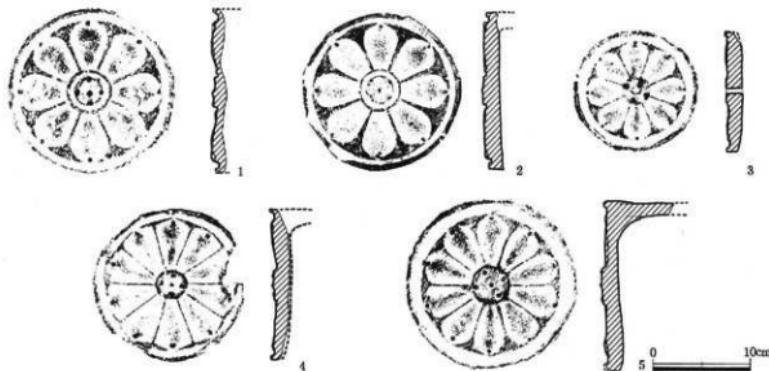
中門の規模は、推定中軸線と中門の東側に取り付く回廊との距離が約6.7mであることから、東西幅は約13.4mと想定できる。南北長は、現状では復元不可能である。

再建期 中門以南を整地し、南門を造営する際には、中門は再建されたと考えられる。このことは、この際の整地土が、創建中門基壇を埋め尽くすまでに盛られており（第19図参照）、この上面で参道側溝と捉えられる遺構が検出されたことからも明らかであろう。ただ、再建後の中門に関して、基壇および礎石などの痕跡はまったく認められなかった。

## 第2節 回廊（第7・8図、図版三）

北方トレンチにおいて、中門に取り付く回廊のうち東側回廊基壇の南辺部分と回廊廃絶時の大量的瓦を検出した。検出した回廊は、中門を検出した調査区での回廊と連続するものであり、中門と同じく創建期に遡る可能性が高い。建築的には礎石立建物であろうが、現状は大きく削平を受けており、上部構造の痕跡はまったく残っていないかった。また、東に向かって傾斜する地形環境の中、水田化が中世より進められているため、東側ほど中世耕作土による削平度が大きく、回廊上面および廃絶時の瓦群が東半ではほとんど残っていない状況であった。

残存する基壇高は、良好な西側で約0.4mである。また、幅約0.7~1.0mの犬走りを形成していたと考えられる。雨落溝の痕跡はなく、南側斜面に自然排水していた可能性が高い。



第6図 中門周辺出土主要軒瓦

また、創建回廊は、中門東辺から東へ長さ約18.0m付近で北に曲がる可能性があり、調査区内で検出した地山削り出しの東傾斜の段差によって、これ以東にはのびないことが考えられる。

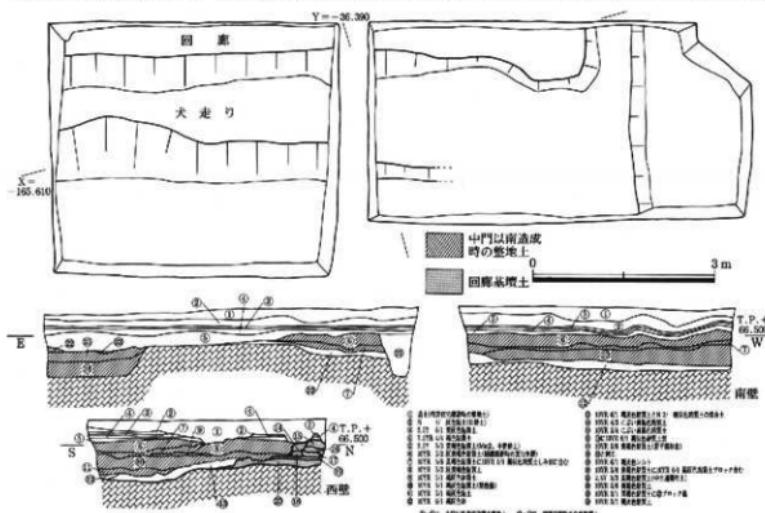
回廊基壇は、断面観察から、ここでは地山削り出しではなく、地山上に褐灰色シルト・黄褐色粘質土・褐灰色粘質土・にぶい黄褐色粘質土などを、版築状に盛土した後に、削り出して成形している（図版八-5）ことが明らかである。また、回廊には基壇化粧の痕跡は認められず、当初からなかったと考えられる。

この調査区内で認められる整地には2時期あると考えられる。一つは、瓦片をわずかに含む黄褐色粘質土（地山土の二次移動）などを用い、回廊基壇前面を一部整形するもので、創建時の整地である。もうひとつは、上述の東傾斜の段差を埋める整地であり、灰色粘土・粘質土・黒褐色粘質土・黄褐色粘質土の順に積んでいる。これらの整地土は、後述する中門以南のぬかるみを埋め立て、中門を再建・南門を建立する際のものと土色および堆積順が同一であることから、中門再建・南門建立段階の整地といえる。この整地は調査区のさらに東へ続くことが明らかであり、回廊ひいては伽藍域内を拡幅した可能性を想起させる整地状況である。

廃絶時の瓦群には、山田寺式軒丸瓦・川原寺式軒丸瓦・平城宮式軒丸（6304系）・軒平（6664系）瓦が含まれており、古い瓦も再度利用しながら、8世紀前半まで葺き替えられていることがわかる。その後、回廊は瓦を葺き替えることなく廃絶したと考えられる。

### 第3節 参道（第19図、図版一下）

中門の南側は創建当时、前述したように、ぬかるみ状態のままであったことが断面観察から読



第7図 回廊創建面平・断面図

みとれる。そして、中門南面から南門北辺まで、南門造営時に谷を完全に埋め立て、整地をして地盤を上げ、参道を造っていることが判明した。参道面は、上面が中世に削平されており残存状況はよくないが、推定伽藍中軸線の

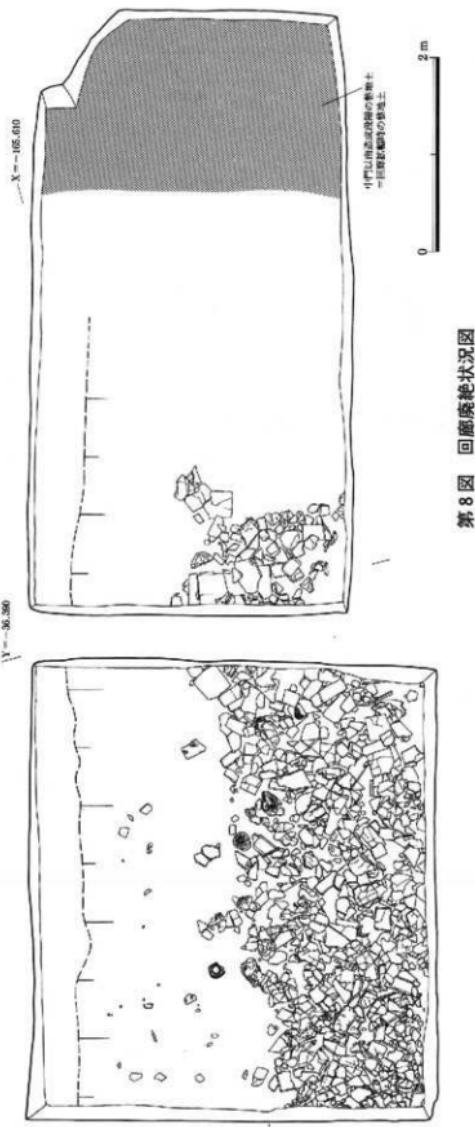
両側に平行する溝が一本ずつ見つかってことから、これらの溝は参道の両脇に掘られた側溝であると考えられる。参道幅は約2.5～3.0mはあったと推定される。

中門・南門間の谷地形内は、砂やシルトが厚く堆積した後に、ぬかるみ状態を示す黒色粘土が最上層に堆積している。この上層を灰色粘土・粘質土で盛り、さらに、黒褐色粘質土と黄褐色粘質土を幾層にも層状・ブロック状に積んで埋め立て、最終的にぶい黄褐色粘質土で整地して、水平地盤面を調整しているものと考えられる。

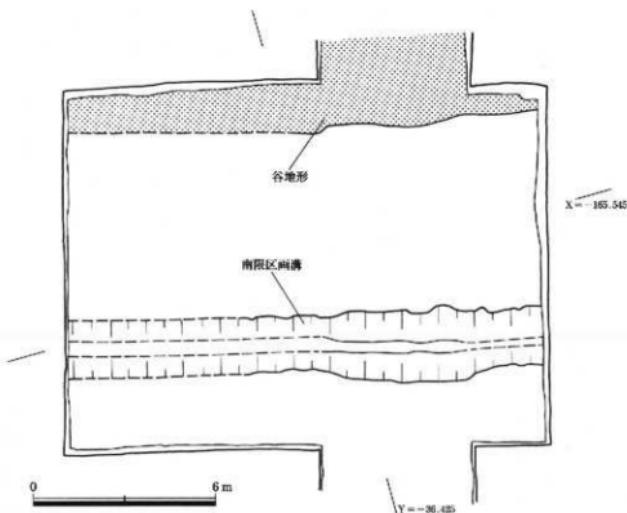
参道の整地土の中には、山田寺式軒丸瓦や重弧文軒平瓦、川原寺式軒丸瓦の小片がわずかながら含まれており、整地の時期の一定点が7世紀後葉に求められる。

#### 第4節 南門(第10図、図版四)

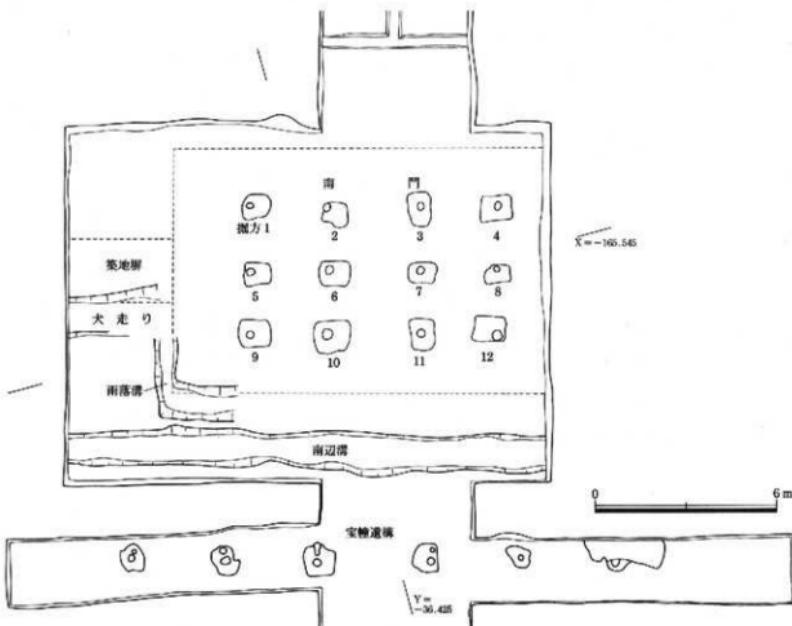
南門は、東西3間・南北2間の東西棟の掘立柱建物である。桁行中央間が約3.0m、両脇間が約2.4m、梁行が約2.1m等間である。正確な尺度論は、中心伽藍の今後の調査も含めて考えないといけないが、一尺が約30cmとすると中央間10尺・両脇間8尺・南北間7尺等間の寸法を採っているといえる。中央間を広く取っ



第8図 回廊廻地状況図



第9図 南門造営以前の遺構平面図



第10図 南門・築地塀・宝幢遺構平面図

ている事実は、この掘立柱建物が三間一戸の門として典型的な構造をもつことを示している。なお、柱間の広い中心の6個の掘方には、柱芯痕跡の下に鶴尾片を礎板代わりに転用しており（第13・14図）、柱間の広い南門の中央を構造上強固にする意図が働いた結果だと考えられる。

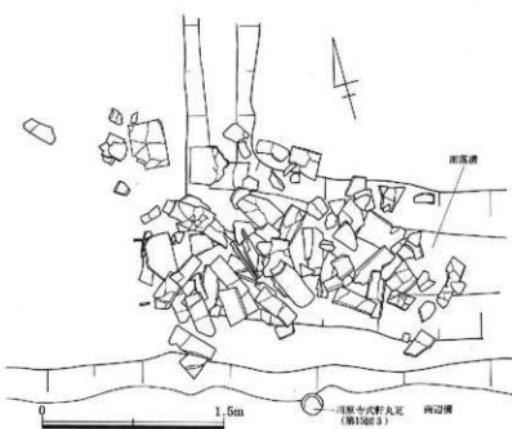
残存状況は悪く、柱掘方の規模や残存深度から少なくとも約0.5mの削平を考えざる

を得ない。しかし、南門の南西部のみかろうじて基壇土が残存しており、黄褐色粘質土・黒褐色粘質土・黄褐色粘質土の順に積まれていた（第12図）。おそらく版築を意識した盛土であろう。

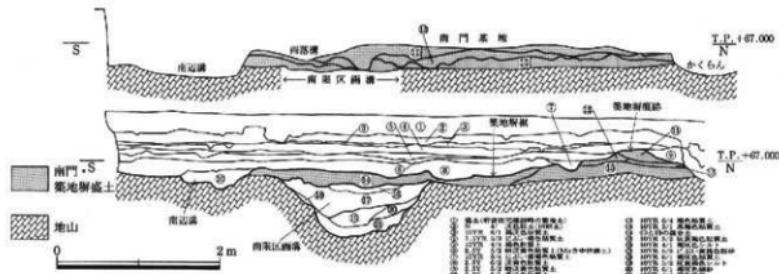
この南門南西隅の基壇土が残る地点で、廃絶時の瓦が崩落したような状況で見つかった（第11図）。崩落した瓦落ちのうち、上部は廃絶以後の土地利用によって攪拌を受けているが、下部では丸瓦や平瓦・駿斗瓦などがほぼ完形に近い状態で出土した（図版八-3）。また、駿斗瓦は、3～4枚が重なった状態で出土しており、崩落状況を良好に示している。そして、これらの崩落瓦群を取り上げた結果、下層から南門南辺および西辺雨落溝を検出した。

規模は、柱掘方から求めた中軸線および棟柱筋と基壇南西隅から、基壇の東西幅約13.4m、南北長約8.2mと推定できる。

時期に関しては、参道整備と南門建立が一連の造作と捉えられることから、上述の参道整地土包含遺物より7世紀後葉以降といえる。このほかに、南門造営時期を推測する手がかりとして、①後述する南門造営以前の南限区画溝出土遺物（第16図）が7世紀中葉までのものであること、



第11図 南門南西隅瓦崩落状況図



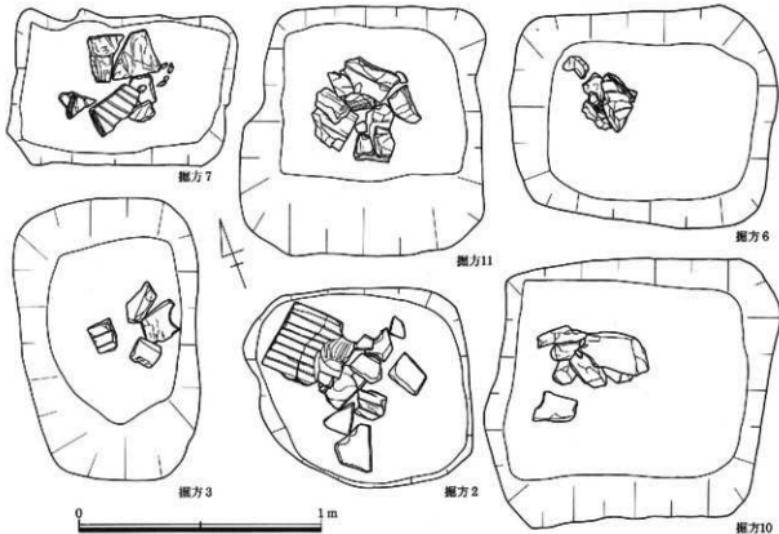
第12図 南門基壇・築地塀と南限区画溝相関断面図

②南門基壇と同時造営（第12図）である築地塀の構築途中に行なわれた地鎮に用いられた土器師3点の年代が7世紀末葉であること、③さらに中央間の両柱掘方6個の礎板に転用された鶴尾が7世紀中葉のものであること、④南門に伴うと考えられる南門南辺溝の中から川原寺式軒丸瓦片IIA09型式が出土していること、などが 第13図 鶴尾片をもつ掘方断面ある。これらを総合的に判断すると、南門の建立は7世紀末葉以降で、かつこれから大きく隔たらない時期に行なわれたとみるのが現段階では妥当である。ただし、今後大量の遺物整理を行う過程で、もう少し厳密な時期を特定でき、修正をする必要が生じるであろう。廃絶の時期に関しては、南門を壊す遺構の年代によって下限を決めるべきであり、周辺遺物を検討していない現段階では、厳密には不明といわざるを得ないが、崩落状況を示す丸・平瓦および周辺から出土する軒瓦が8世紀前半のものまでに限られることから、以後瓦の差し替えが行われることなく、耐用性の弱い掘立柱建物ということもあり、おそらくは8世紀末葉頃までには廃絶していたのではないかと考えられる。

なお、南門が中門から約35mと離れすぎているが、これは寺域選定の際、中門・南門の建立位置を地盤の弱い谷地形から避けようとする地形的制約を受けた結果だと考えられる。

## 第5節 築地塀（第12図、図版六上）

南門に取り付く西側の築地塀の跡を検出した。約0.2mの高まりを残すのみであるが、この高



第14図 南門柱掘方内礎板転用鶴尾出土状況図

まりは南門の中央の棟柱列と同じライン上に位置しており、南門の南北辺中央に取り付く築地塀の痕跡と見て間違いないであろう。また、土層の連続性から南門基壇構築と一連の作業で造られていることも明らかである。また、築地塀構築の途中で土師器を3個伏せて置いた状態（図版八-4）があり、地鎮など儀礼的行為を行っていたと考えられる。

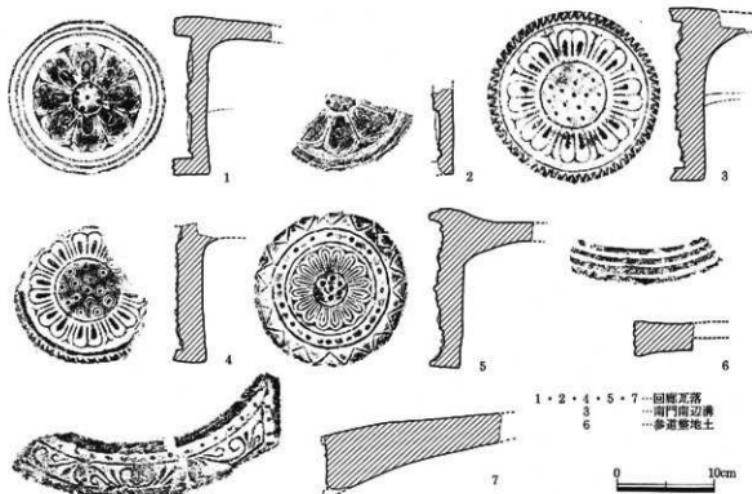
この築地塀の幅は推定復元約2.1mで、幅約0.6mの犬走りがあったと考えられる。

## 第6節 宝幢遺構（第10図）

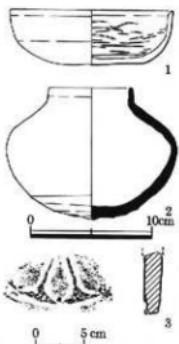
南門の前面で6本の柱の掘方を検出した。この掘方は約3.3m間隔の11尺等間で、柱芯痕跡が東西方向に一直線上に並び、南門の柱列と平行している。各掘方に柱芯痕跡をもち、単独に存在することから、幢竿支柱ではなく、幢竿そのものを据える掘方であり、宝幢遺構の可能性が高いと考えられる。ただ、幢竿は儀式の際に立て、儀式が終わるとはずすのが通常であるため、芯痕跡をもち抜き取り痕跡のない当遺構に関しては、一種の柵列とみる可能性も残る。

## 第7節 南限区画溝（第9・17・18図）

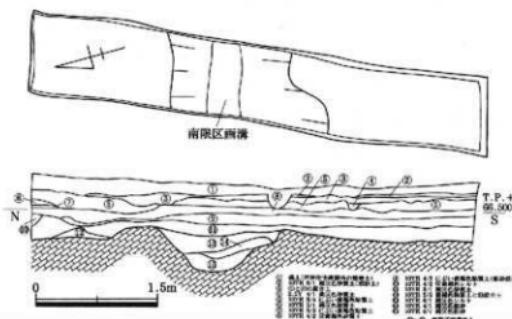
南門造営以前の遺構 南門建立以前の遺構として、東西方向の一直線の溝が存在する。溝埋土と基壇構築土との関係（第12図、図版六下）から、南門建立以前と特定できる。幅は約2.0m前後、深さは約0.7mである。この溝は東方トレンチおよび西方トレンチでも確認しており（図版八-1・2）、少なくとも東西に約60mはのびていることが明らかである。なお、この溝は、幅が西方が広く、東方が狭く検出しているが、それは東側ほど削平を大きく受けているためである。



第15図 南門・回廊・整地土出土主要軒瓦



第16図 南限区画溝出土遺物

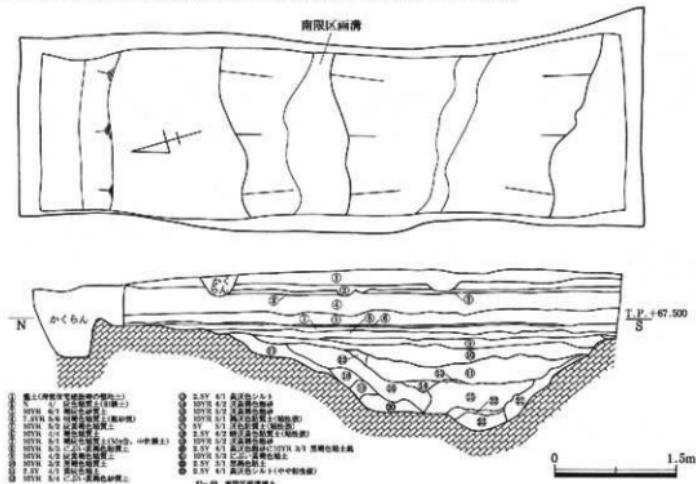


第17図 東方トレント平・断面図

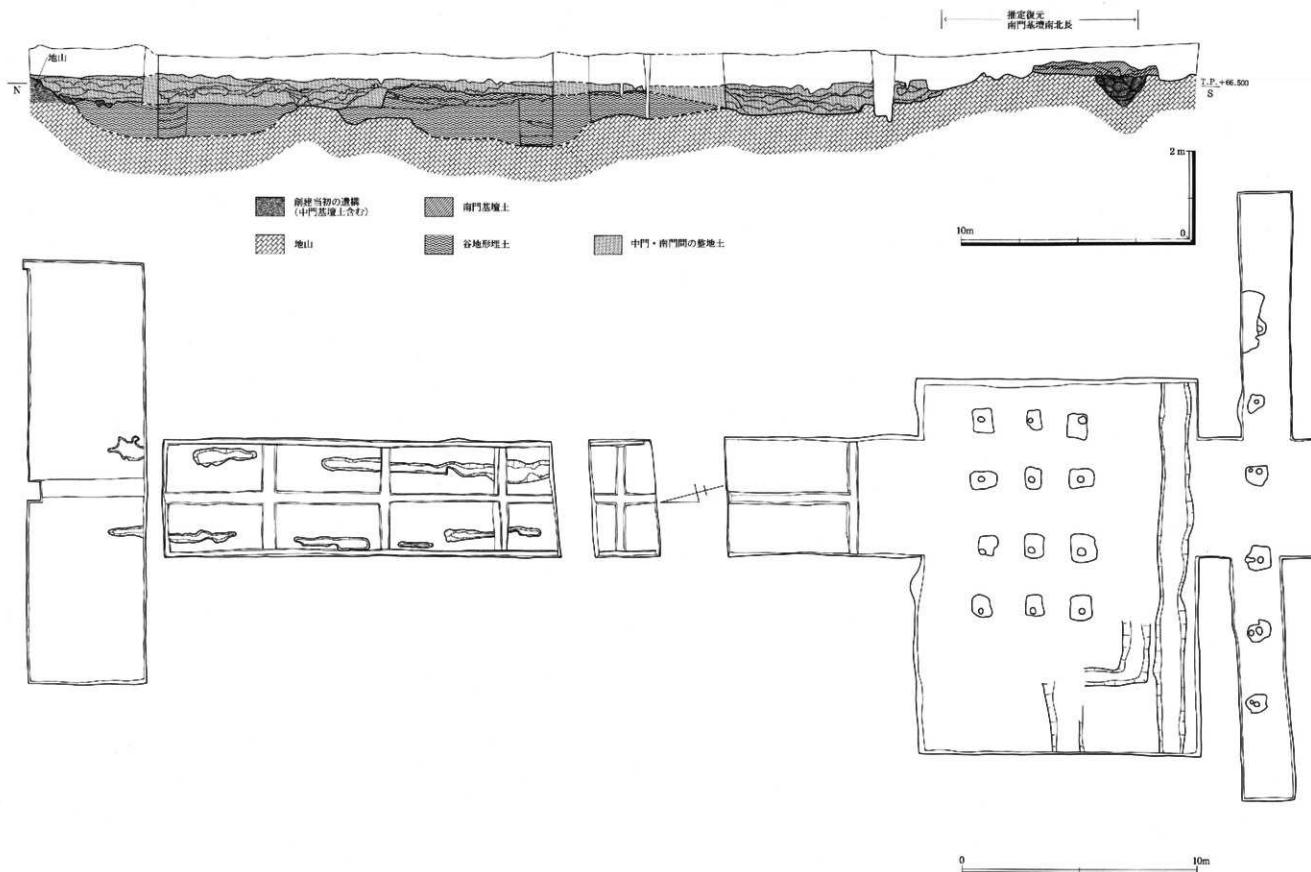
この溝の埋没時期は出土遺物（第16図）から7世紀中葉と推定できる。結果的に南門が上層に位置すること、溝が一直線でかつ伽藍と平行すること、伽藍の東西幅とほぼ同一になることなどから、寺域の南限を設定する溝であり、おそらく主要伽藍造営の時期に南限を画し、かつ北西からの雨水を排水する機能を持たせた溝であったと考えられる。そして、新堂廃寺が主要伽藍を造営するときに、すでに南門建立を予定にいれて寺域を決定していたことが窺える。

なお、西方トレントは、南門西側で検出した築地塀の延長線上にあるが、近代水田耕作による削平が大きいために確認できず、築地塀がどこまでのびるかは不明である。

また、西辺を画する溝の有無を確認するために北西トレントを設定したが、当時の谷地形を検出したいたどり、この地点では溝等の施設は存在しないといえる。



第18図 西方トレント平・断面図



第19図 南門造営後の遺構面および中門・南門間整地状況断面図

## 第4章 寺域南側の調査

### 第1節 造営以前の景観

寺域の南側の調査によって、新堂廃寺造営以前の旧地形がかなり明確に推定できるようになった。つまり、調査によって検出した遺構面は、中位段丘上および一部存在した低位段丘上を、中世時の水田化にともなう大規模開発によって、広範囲に整地が行われた結果、形成された平坦面であることが判明した（第20図）。

造営以前から存在していた遺構として確実なのは、調査区の中央を西から東方向に流れる自然流路である。この流路は、西側に存在する羽曳野丘陵が形成する谷地形に起因している。この流路内からは、繩文土器・弥生土器片や石器類がわずかに出土しているのみであるため、新堂廃寺造営前には既に埋没していた可能性が高い。また、これより以南の、調査区南東部では、南東方向に2m程の落差をもって傾斜していく地形を形成している。このように、新堂廃寺造営以前の当地は、西側の羽曳野丘陵から東側に派生する丘陵部が、細長く舌状に何本も張り出す、起伏の多い地形であったといえる。

### 第2節 造営時および直後の景観

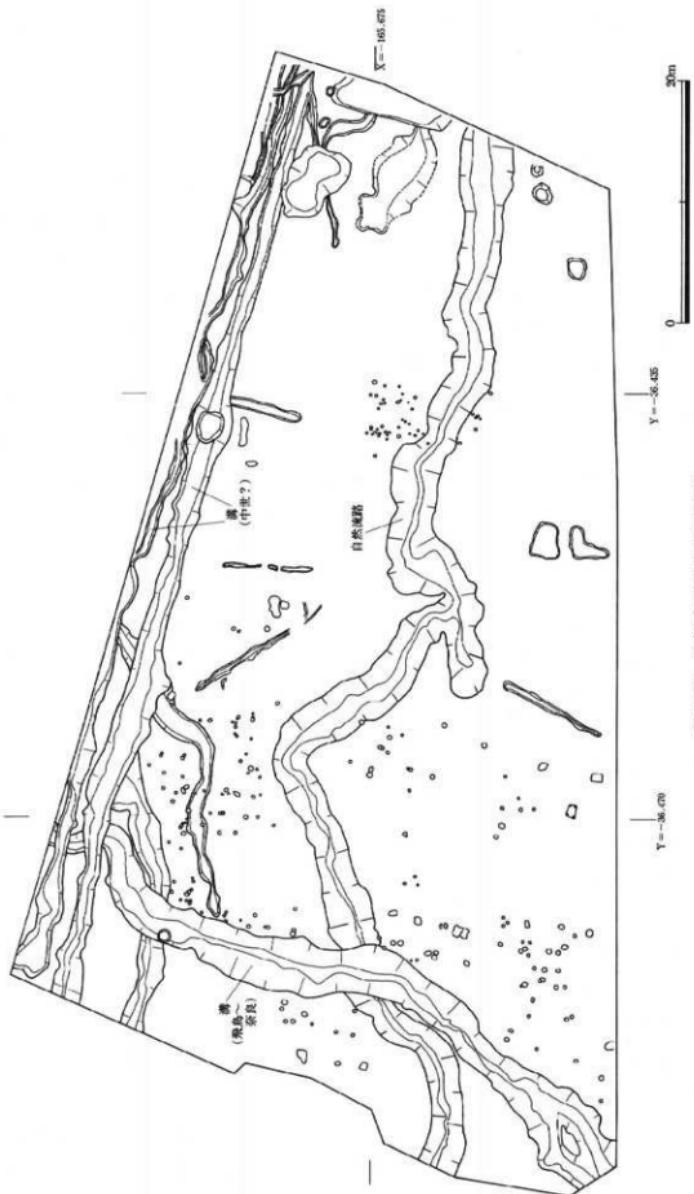
新堂廃寺造営に伴う可能性の高い遺構としては、調査区西端をほぼ南北方向に走る溝である。この溝は幅約5.0m前後、深さ約1.8mを計る。下層は砂・シルトの流水堆積層であるが、上層は大量の土器・瓦を含む暗褐色粘質土および黒褐色粘土層である。この溝からは、数百箱にのぼる遺物が出土しており、詳細な掘削時期・埋没時期の検討は今後の遺物整理を待たねばならないが、包含遺物は、飛鳥時代から奈良時代までではば取まるようである。

寺域の造営にあたり、南限を画する溝と同様、西側の丘陵からの雨水の流れ込みを防ぐとともに、寺域西側を画する機能も有していた可能性があり、造営後も破損瓦や不要土器を廃棄した溝であったと考えられる。

この溝が存在する段階で、調査区南東部の急激な地形傾斜はまだ存在しており、伽藍完成後も南門以南は直線的に人が往来できない地形であったといえる。

### 第3節 廃絶後の景観

伽藍の大半が廃絶した後の平安時代には、小規模な建物が存在したにとどまっていたようであり、集落等を形成していた痕跡は認められない。そして、中世に、前述の南東部分での地形傾斜を大規模な整地で埋め立て造成し、客土をして耕地化を行った。この整地土中には、13世紀代の羽釜片や、時期不明の径25cm程の曲げ物などが含まれていた。この段階をもって、初めて新堂廃寺南面は平坦面を形成し、以降府営住宅建設まで耕作地として利用され続けることとなる。



第20图 寺坡南侧调查区平面图

## 第5章 出土遺物

### 第1節 軒瓦（第21・22図、図版九・十）

本年度の調査においては、軒丸瓦 I A02～05・13、II A07～09・11、IV A12の10型式と、軒平瓦 II BおよびIV B03、垂木先瓦 I C01・02が出土している。各型式の詳細については、1995・96年度の概要で報告済みであるので、本稿では今回出土の資料によって、主に製作技法について補足的な記述をするにとどめる。型式名称については、前概要を踏襲し、Iが飛鳥時代、IIが白鳳時代、IVが奈良時代を示し（IIIは藤原宮併行）、Aが軒丸瓦、Bが軒平瓦、Cが垂木先瓦を示す。また、各型式の細分については、従来範傷の進行による変化をアラビア数字で表し、II A11に見られるような文様のずれを小文字アルファベットで表したのに加え、今回製作技法の相違による細分を、小文字ローマ数字で表すこととした。

I A02 中房周溝に大きな範傷がない段階のものと、ある段階のものとが存在する。また、丸瓦接合技法に2種が確認でき、I A02-i（第21図-1、図版九-1）、II A02-ii（第21図-2）として区別する。02-iは接合に際し、丸瓦の広端凹面側を面取りするのに対して、02-iiは無加工の丸瓦を接合する。前者には範傷のないものとあるものの両者が含まれ、後者は範傷のあるものだけなので、i→iiの時期差と捉えられるが、資料数が少ないと同時期の工人差である可能性も否定できない。なお、両者に共通する技法上の特徴として、瓦当裏面下半の外周を強くユビナデすることが挙げられる。このユビナデは、二本の指で裏面と側面の角をつまむようにして施されている。

I A03 02によく似るが、弁の膨らみが02に比べて小さいことで識別できる。この03の範を彫り直したものが02である可能性が指摘されており、事実双方とも、中房を挟んで対置される間弁に一対、直線上に乗らないものがあるなど、酷似するといってよいが、改範を是認する積極的根拠は見いだせなかった。現況ではむしろ別范と見ておくべきであろう。丸瓦接合技法には2種がある。03-iは丸瓦凹面側を面取りし（第21図-3、図版九-2）、03-iiは無加工のままである。今回の出土資料では、裏面はともに不定方向のナデで平滑に仕上げているが、既往調査では下半外周にユビナデを施すものが出土している。

I A04 中門で瓦当面完形のものが1点あるほかは、小片が数点出土したのみである。

I A05 丸瓦凹面側を面取りして接合する（第21図-5、図版九-3）。丸瓦無加工のものも報告されているが（井西1998）、今回は確認できなかった。四天王寺と同范の可能性が指摘されているが（上田1998）、未確認である。

I A13 素弁10葉で、1+4の蓮子をいびつに配する。瓦当裏面下半外周をユビナデする。丸瓦接合技法は明らかでない（第21図-6、図版九-4）。

II A07 範に外縁部分の粘土を詰める時、押し込んだ粘土の上面を一旦範の外周にナデつける

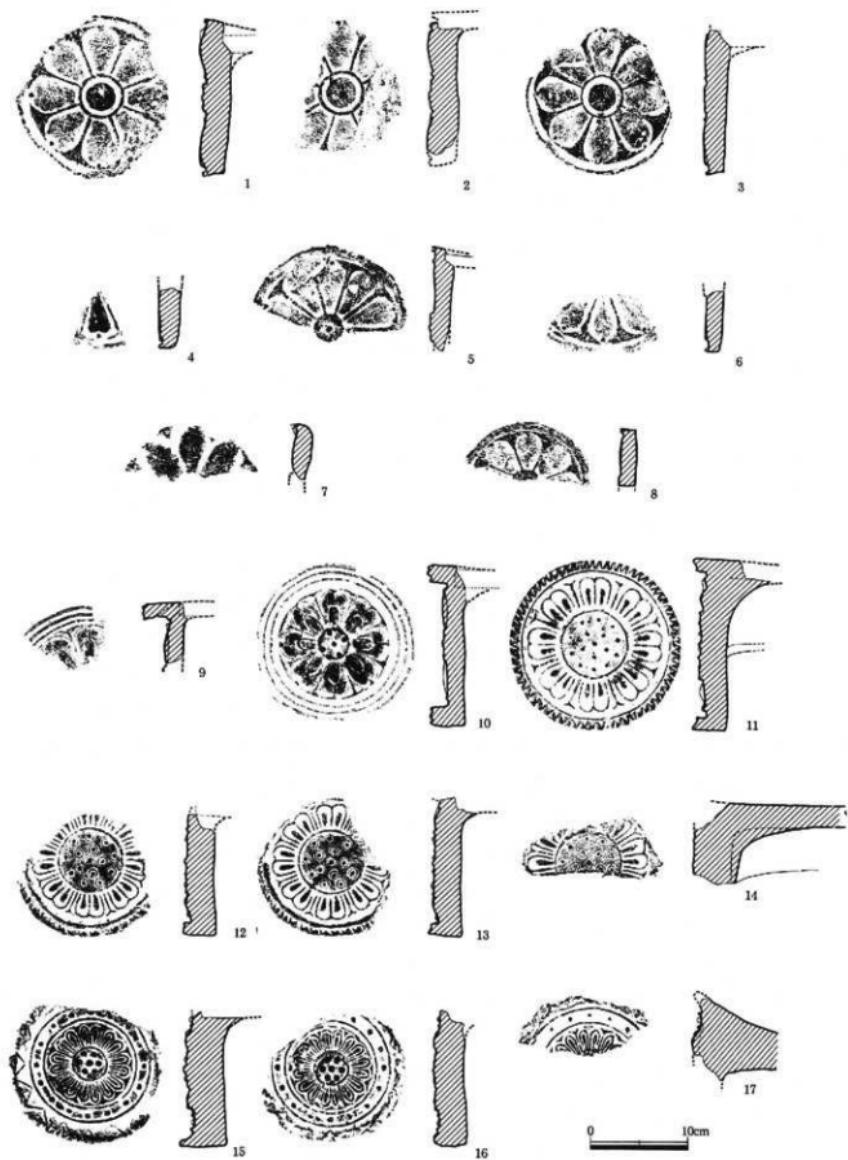
ため、外縁破断面には外傾の接合線が現れる（第21図-9、図版九-7）。外縁内面においてこの接合部を無調整のまま放置するため、この部分での剥離が顕著である。このような状態の外縁はII A08には認められず、技法的特徴と認めてよいと思われる。丸瓦の接合はいわゆる歯車接合である。丸瓦端面の切り欠きの形状は、従来三角形のものが認められていたが、今回の資料には四角形ないし台形のものがある。切り欠きの幅は、1.5~2.0cmと大きい。

II A08 瓦当完形の個体を含め多数出土した（第21図-10）。弁央に軸線をもたないことで範種の区別がされてきたが、わずかに表されていることが判明した。裏面は丁寧なナデで平滑に仕上げられ、下半外周のみヘラケズリされている。接合は歯車接合で、丸瓦への切り込みは07同様である。また、この型式に関して興味深いのは、外縁の三重圓文を挽型によって施文していることである（図版九-8）。その根拠として、①圓線の「山」の中心にごく浅い溝が走る。これは両側の「谷」を削り出した際の粘土が「山」にかかり、中心部分のみかぶらなかつたためであり、軒平瓦の型挽き重弧文によく見られる現象である。②外縁頂部からおよそ7mm下の内外面に、挽型端部のアタリと見られる段差が残る。範端であれば内面には現れないはずである。③1回転目より2回転目の挽型の當て方が浅かったため、「谷」底に部分的に段差が生じている個体がある。この段差はオーバーハングしており、垂直方向に抜き取る範の産物ではあり得ない。④回転方向の擦痕がのこる。この①~④が常にひとつの個体中に認められるわけではないが、実見したほとんどの個体にそのいずれかが認められた。このことから、仮に範にも重圓文が彫り込んでいたとしても、事実上挽型によって施文されていたと考えられる。なお、この挽型施文によって、外縁の高さにも各個体で若干の差異がある。挽型には複数種あるようである。

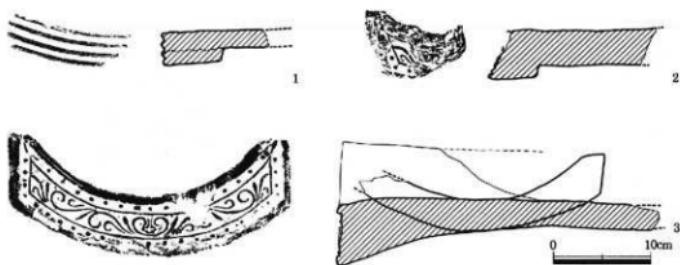
II A09 瓦当径や蓮子配置のほかに、面違鋸歯文が中心から見て右下がりであること、外縁の内側に凸線がめぐることがII A11と見分けるポイントとなる。接合は歯車接合で、丸瓦を四角形ないし台形に大きく切り欠く（第21図-11）。なお1点のみ、無加工の丸瓦を瓦当粘土に置いた後、凸面側の接合線を棒状工具でタテに突きつぶす特殊な例がある（図版九-9）。

II A11 面違鋸歯文は左下がりで、鋸歯文の内側には平坦面が巡る。丸瓦の接合技法から3種に細分が可能である。11-iはユビで接合溝を作り無加工の丸瓦を差し込む（第21図-12、図版十-1）。11-iiはユビで作った接合溝に三角形の切り欠きの歯車接合を行う（第21図-13、図版十-2）。したがって、丸瓦の切り欠きに瓦当側の粘土が完全に食い込まず、歯車接合の効果を半減させている。切り欠きは幅が1cm以下と小さい。11-iiiは横置台一本作りである（第21図-14、図版十-3）。今回出土の資料による限り、11-iとiiの間に明確な範傷の多寡は認められないが、この2種とiiiとでは、明らかに後者の方が範傷が増えている。なお、この型式は前回までの報告で、中房と内・外区の文様のズレによってa~cの3タイプに分けているが、接合技法との関係は明らかにできなかった。資料数が少なく断言できないが、次のIV A12と接合技法のバリエーションが一致し、かつ酷似することからこれと同時期のものであると考えたい。

IV A12 奈文研分類による6304系の文様を飾る。現物照合は行っていないが、平城宮例とは珠



第21図 出土主要軒丸瓦型式一覧



第22図 出土主要軒平瓦型式一覧

文数や、珠文と鋸歯文の位置関係が一致せず、別範と認められる。この型式にも3種の接合技法が確認できた。12-iはユビによる接合溝に無加工の丸瓦を差し込む（第21図-15、図版十一-4）。12-iiはユビによる接合溝に三角形の切り込みの歯車接合を行う（第21図-16、図版十一-5）。歯車の効果が十分發揮されていないのはIIA11と同様で、切り欠きもまた同様に小さい。12-iiiは横置台一本作りである（第21図-17、図版十一-6）。iiiは瓦当中央を貫く大きな範傷をもつが、iとiiはこれがない段階のものである。

II B 重弧文軒平瓦は破片のものが多く、観察分類に特に慎重さを要すると思われるため、今回詳しくは述べないことにする。気づいた点を挙げておくと、頸部の接合において、平瓦凸面にヘラによるヨコ方向の沈線を5～6条入れるものがあること、頸を貼付した平瓦の広端に薄い粘土板を足して瓦当としたものがあること、などがある。後者のような作り方をする理由については、頸部の複合線が瓦当面に現れるのを防ぎ、かつ頸粘土の接合を補強するためと推測する。

IV B04 6664系であるが、拓本の比較によれば平城宮・後期難波宮ともに同範関係は認められない。今回出土のはほとんどは曲線頸であるが、1点のみ浅い段頸のものが出土した。

大阪府教育委員会 1996 『新堂廃寺発掘調査概要』

同 上 1997 『新堂廃寺発掘調査概要II』

井西貴子 1998 「河内新堂廃寺の創建瓦について」『飛鳥時代の瓦づくりI』 奈良国立文化財研究所

上田 雄 1998 「河内の斑鳩寺・四天王寺系軒丸瓦」『飛鳥時代の瓦づくりII』 奈良国立文化財研究所

## 第2節 道具瓦他（第24図、図版十一）

〔鶴尾〕 鶴尾は寺域内外から4型式6個体分以上が出土した。

1は胴部・縦帯・鱗部を含む尾部に近い破片で、幅0.7cmの縦帯を軸に胴部と鱗部の段が互い違いに配され、ともに正段型である。胴部・鱗部ともに厚さは1.3～1.6cmと非常に薄手の作りで、6世紀末とされる飛鳥寺西門所用の鶴尾と酷似し、7世紀初頭の最古式の鶴尾と考えられる。

2は左・右両側面の胴部下端の2片が出土したうちの一つである。灰白色を呈す。厚さ3.2～3.5cmと比較的薄手で、幅3.7～6.6cmの段を逆段型に作る。両片とも上辺は降棟基部を差し込

む半円形透かし穴の下端にある。

頂部（3）・鰐底部（4）は灰色を呈し、焼成は堅緻である。他に同一個体と思われる腹部などが2片ある。幅1.5～2.5cmの低く平坦な縦帯を持ち、胸部・鰐部内外面の段はいずれも正段型で、互い違いに配される。鰐部は腹部の取り付け部から外側に撥状に広がる。これらの特徴から7世紀中葉のものと考えられる。

南門の柱掘方からは礎板に転用された状況で出土し、頭部・脊稜・胸部・縦帯・鰐部・腹部を含む左側面の大部分が残る。5はその一部である。胸部長は58cm、頭部・腹部幅は復元幅で約50cm、復元高は97cm（現存高84cm）である（第23図）。胸部・鰐部外面には正段型を削り出す。胸部の段は縦帯の上方に巻き込むような形をとり、鰐部の段とは連続しない。幅2.0cm前後の断面方形に削り出した縦帯には三条の波状文、断面蒲鉾形の脊稜には火炎文もしくは波状文らしい沈線をヘラ描きしている（図版十一左下）。表現は比較的稚拙である。鷲尾の縦帯に手描きで施文する例には、福岡県堂かへり窯出土鷲尾の忍冬唐草文がある。頭部に近い側面には降捺用の弧形の透かし穴が上方に向かって斜めに穿たれ、その下方では胸部下端に半円形の抉りがある。後者は取っ手もしくは鷲尾の固定に関わる用途が考えられる。

また腹部には下端に蝶羽の拌みの瓦をはめ込むための半円形の抉りのほかに、円形透かし穴もあり、後者の右上部に文字がヘラ書きされていた（6）。読みの試案としては「頂□（張カ）」が挙げられる。頂には「瓦製品」などの意味があるが、非実用的な文字でもあり、確定はできない。後者の文字はかなり崩れており、不確定要素を含む。胸部の段のあり方は古式の様相を呈すが、やや厚手であることから7世紀中葉のものと考えられる。

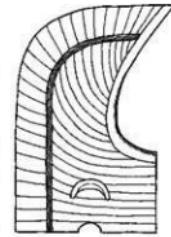
〔鬼瓦〕3型式が出土したが、文様が残存する2型式のみ報告する。

7・8のタイプの鬼瓦は寺域内外から計3個体分が出土した。うち1点は左下部を欠くがほぼ完形である。長さは26.5cm、幅約27.0cmで、突出した外縁と鬼面を持つ。鬼面は稚拙な表現であるが、巻き毛の配置や外縁のあり方、抉りの作り方、珠文をもたない点などは平城宮式鬼瓦、特に奈良時代前半のものと共通する点が多い。共伴した平城宮式軒瓦が概ね平城宮瓦編年の第二期にあたることもそれを傍証する。再建時の建物に使用されていた主体の鬼瓦であろう。

9は右下部1片が出土した。外縁と三本の巻き毛基部が残る。これは『富田林市史』に掲載されたものと同型式で、これもやはり奈良時代の作と考えられる。

〔螺旋〕10の1点のみの出土である。範型による成形で、底径2.4cm、高さ3.3cmの円錐形である。底部に穴はなく、ほぼ平坦である。〔亀田1998〕によると、丈六仏に伴う螺旋の範疇に入ると思われる。

〔不明瓦製品〕11は厚さ4cm前後の盤面に、削り出した低い外縁と筋骨隆々とした腕の一部が表現されている。裏面・側面は丁寧にヘラケズリされ平坦である。文様部分は範によると推定されるが、指や細かいへら工具で整形を加えている。長谷寺法華説相図中の仁王像の表現とも



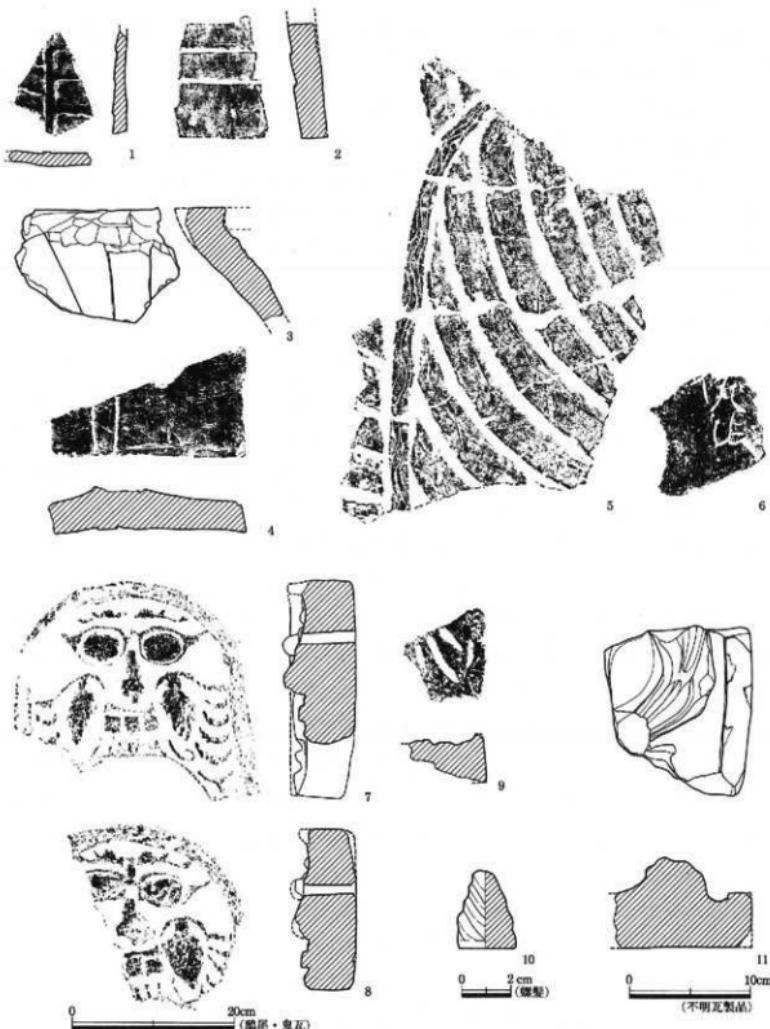
第23図 鷲尾復元図(1/20)

共通し、仁王像などを表した大型の埴仏の可能性も考えられる。

亀田修一・菜穂子 1998 「塑像螺髪に関する観察」 『網干善教先生古稀記念考古学論集』

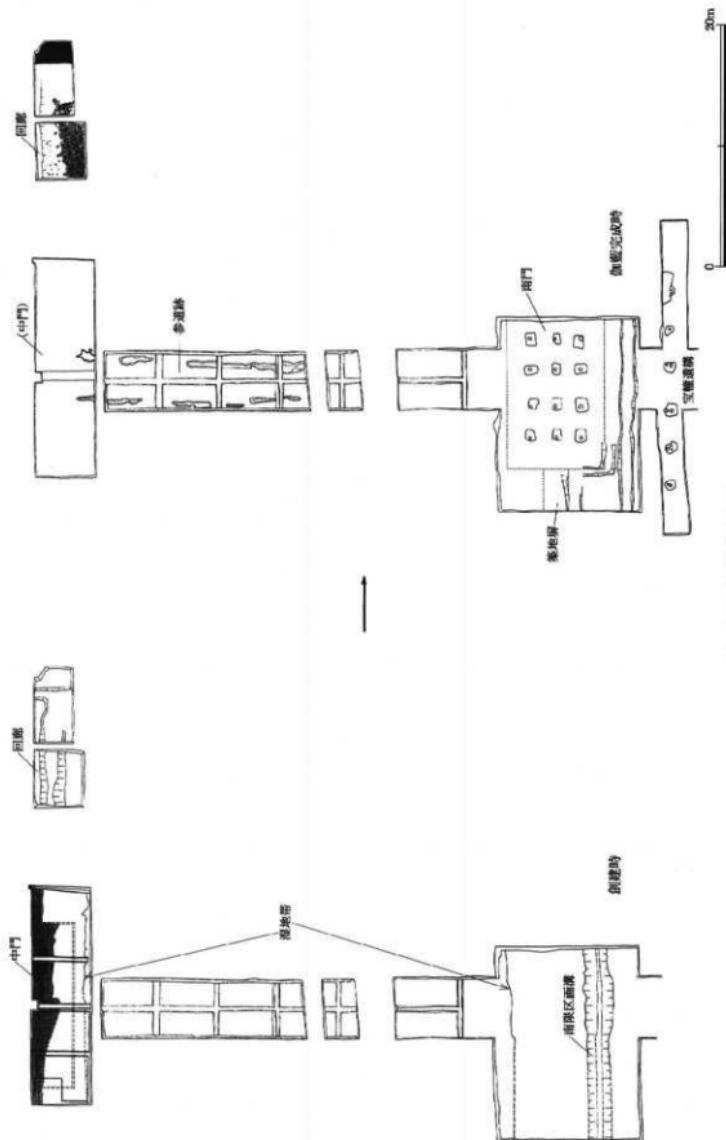
北野耕平 1981 「歴史時代の富田林」『富田林市史』 富田林市史編集委員会

奈良国立文化財研究所 1980 『日本古代の鶴尾』 飛鳥資料館図録第7冊



第24図 鶴尾・鬼瓦・螺髪・不明瓦製品

第25图 退耕变造图



## 第2節 伽藍の復元～歴史地理的検討も含めて～（第26・27図）

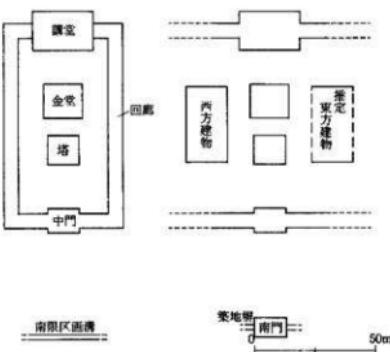
新堂廃寺は、創建当初、中門・塔・金堂・講堂を南北に一直線上に建て並べる四天王寺式を基本とする伽藍配置をとっていたことがわかった。ただ、第1節で述べた基壇状遺構が、非機能的な中門に対する実用的な東門である可能性も残ることから、新堂廃寺独特の伽藍配置をとることも否定できない。

1959年段階の旧地形図を基に、今日までの主要な調査成果を当てはめてみると、新堂廃寺の寺域は、旧地形とかなり整合性をもって遺構が広がっているといえる。つまり、寺域周辺の畦畔は伽藍配置と方向を一にしており、推定講堂跡から南門までの南北長約150m、東西幅約80mの長方形区画をもつことが看取できる（第27図）。そして、その長方形区画を画するかのように、南限区画溝や1984年市教委調査の南北溝が存在することは、両遺構が寺域の造営に大きく関わっていることを示している。

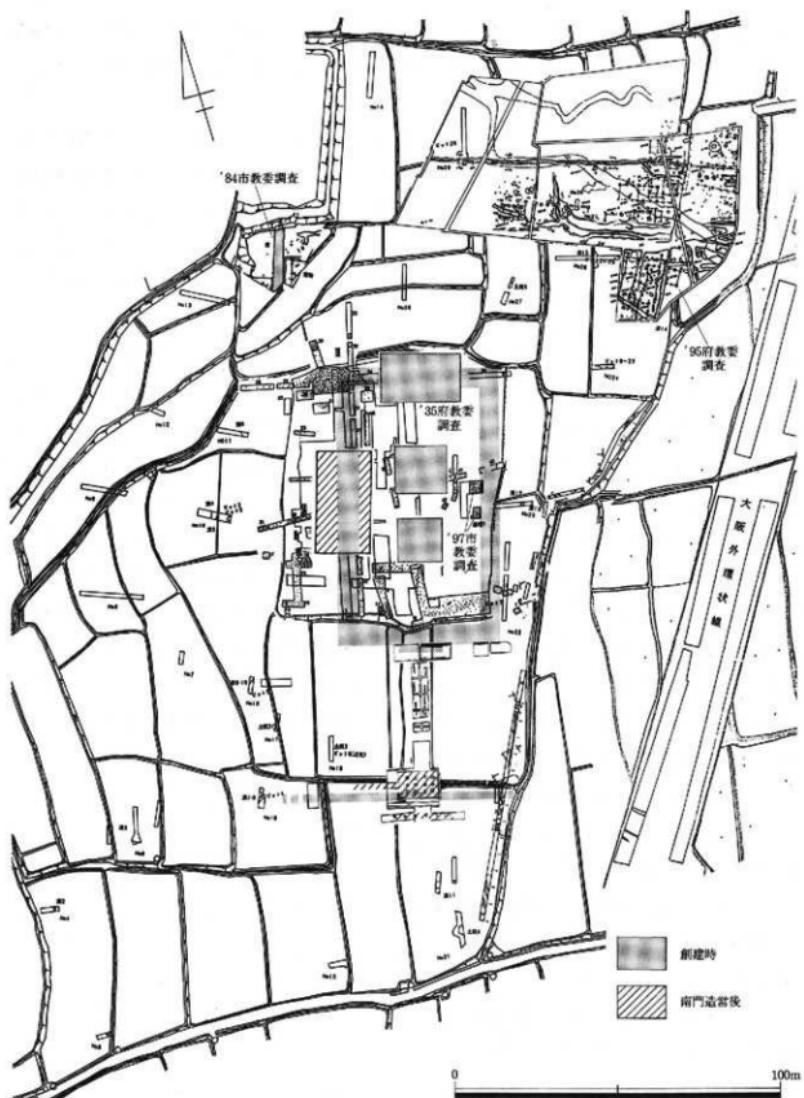
旧地形図を見てみると、主要伽藍がおさまる北半の方形壇南辺中央付近に中門は存在し、南門は長方形区画の南辺中央に位置している。さらに、中門・南門間には、周辺には見られない細長く直線状の田地があり、参道側溝を検出したことからも、道路状痕跡をとどめていたと見ることができる。また、検出した回廊東辺をもとに反転復元を行ったが、講堂に取り付く伽藍に復元した地形的根拠としては、講堂と北辺東側回廊の基壇の痕跡と思われるような、湾曲した畦畔が残っていることを指摘することができる。検出した創建回廊の東端を北にのばすと、北半方形状壇のはば東辺にあたることも示唆的である。これらの検討から、新堂廃寺は当初から四天王寺式の伽藍配置であった可能性は高い。なお、塔・中門と南門は造営時期が異なるものの、すべて東西幅約13.4mの同一規格であり、長期間にわたる統一的な建築設計があったことを想起させる。

南門造営以後の伽藍がいかなる配置を考えるに、奈良時代になって建てられたとみられる西方建物を考慮しなくてはならない。これに対応する東方建物が、前述の基壇状遺構であれば、長方形区画東辺の内側におさまり、伽藍の配置としては矛盾しない。しかし、拡幅した可能性のある回廊を復元するには、西・東方建物とも近接し、伽藍復元として妥当か否か疑問を残す。現段階では、回廊および伽藍域の拡幅を指摘することと、伽藍の完全な復元は今後の調査の成果を待ちたい。

なお、西方建物の南北辺から中軸を設定し、東に延長すると、長方形区画東辺で不自然に張り出す部分が認められる。これを建物基壇痕跡と見ることもでき、伽藍の復元を試みる時、示唆的である。



第26図 伽藍復元図



第27図 旧地形図と調査成果

# 図 版



上空（西）から新堂廃寺を望む



参道検出状況と主要伽藍跡地（南から）



中門基壇検出状況（南から）



中門基壇及び東回廊検出状況（南東から）



回廊創建面検出状況（西から）



回廊廃絶状況（西から）



南門・宝幢遺構検出状況（南から）



南門・宝幢遺構全景（南から）



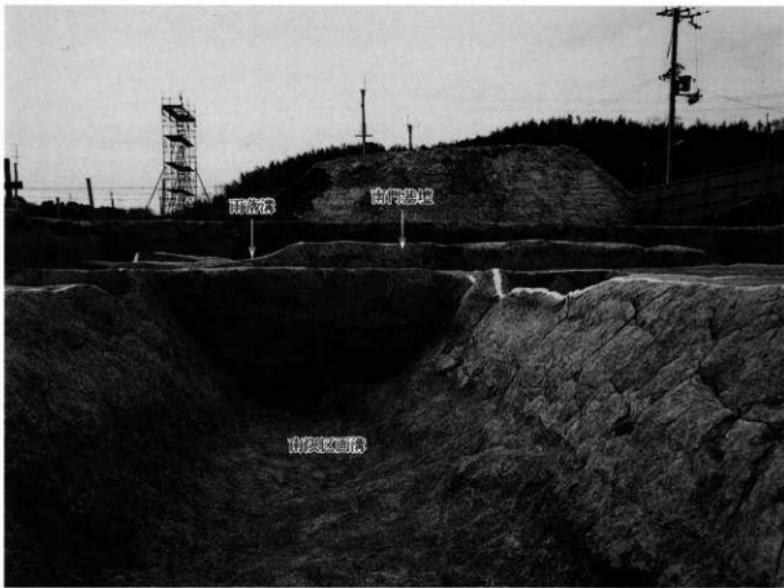
南門瓦落検出状況（南から）



南門基壇南西隅検出状況（南から）



築地場検出状況（南東から）



南限区画溝・南門基壇相関関係（東から）



寺城南側調査区東半（西から）



寺城南側調査区西半（北から）



1、西方トレンチ全景（北から）



2、東方トレンチ全景（南から）



3、南門瓦崩落状況（東から）



4、築地堀地鎮遺構（南から）



5、回廊基壇断面（南東から）



6、掘方 7 磚尾出土状況（北から）

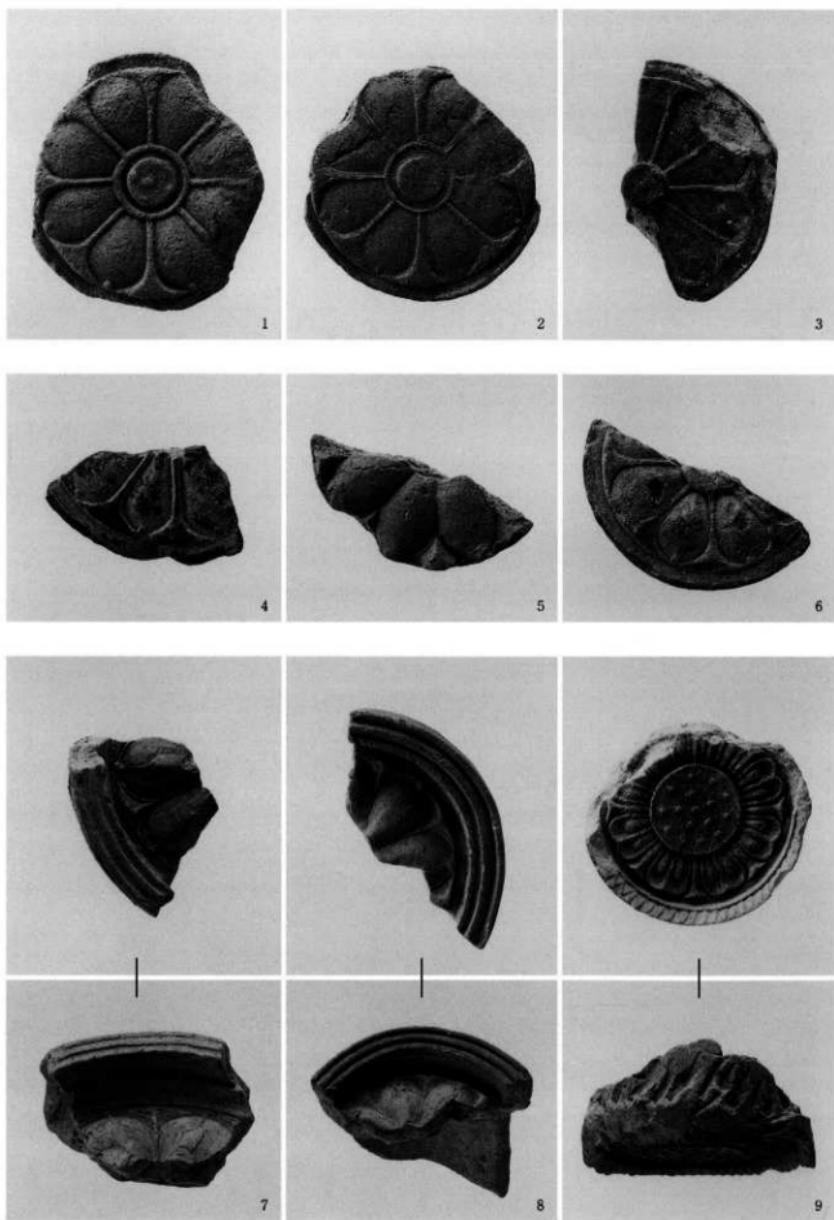


7、掘方 11 柱芯痕跡と礎板転用磚尾（南から）



8、掘方 11 磚尾出土状況（上が南）

圖版九  
出土主要新瓦(1)





1

2

3



4



5



6

圖版十一 鳥尾·鬼瓦·蝶瓦·不明瓦製品



24-1



24-10



24-11



24-7



24-6



24-5

# 報告書抄録

ふりがな	しんどうはいじはっくつちょうさがいよう
書名	新堂廃寺発掘調査概要Ⅲ
副書名	
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小浜 成
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課
所在地	〒540 大阪府大阪市中央区大手前2丁目
発行年月日	1999.3

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ...	東経 ...	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しんどうはいじ 新堂廃寺	おおさか ふとんだけやし 大阪府富田林 しんどうはいじからう 市緑ヶ丘町 1615番の一部	27214		34° 30' 27"	135° 36' 15"	1998年7月 1999年~3月	約3,800	府営住宅建て替え

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新堂廃寺	寺院	飛鳥時代 ~奈良時代	南門、中門、回廊 築地塀、参道側溝 宝幢遺構 寺域南限区画溝 溝、自然流路	土師器 須恵器 瓦 鷲尾 鬼瓦 他	創建時の門・回廊 南門基壇・宝幢遺構 礎板転用鷲尾 寺域の南を画する溝 純粋なAT火山灰堆 積層 新堂廃寺の伽藍配置・ 造営過程が明らかとなつた。



